

# 市民ネットワークちば



湯浅美和子



山田京子

市民ネットワークの代理人(市議会議員)

発行責任者 山崎邦子・佐々木典子

編集・発行 市民ネットワークちば 〒260-0013 千葉市中央区中央4-10-11 TEL043-201-2551 FAX043-223-7701

## 千葉市は女性が働きやすい街ですか?子育て編

女性が働き続けたいと考える時、多くの場合避けて通れないのが子育てと介護の問題ではないでしょうか。逆にいえば、この問題を解決できれば女性は安心して働くことができるのです。では、働く女性にとって千葉市は子育てしやすい街なのでしょうか。

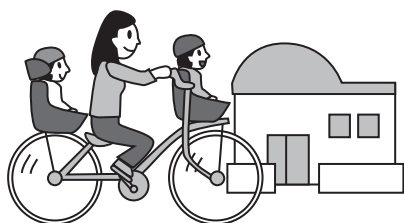
### 女性が働くことについて



昨年10月来日したIMF(国際通貨基金)のクリスティーヌ・ラガルド専務理事が、セミナーやテレビ出演を通じて「働く女性を増やせば、日本経済が良くなる。そのことを伝えたい」という発言をされたこと、覚えておられますか?

「女性の労働力数を上げることが大切。保育所不足と、家に留まるようにという社会的プレッシャーによって産後仕事を辞める人も多い。女性も仕事を続けられるための良い保育施設、支援、受け入れる文化があれば、それが日本経済を最良にする。女性リーダーを増やすことも大切。牽引力となつて他の女性も引き上げるから。労働時間の短縮は生産性・私生活の両面から良いことが多いが、企業が不利益になる仕組みにはしないこと」という話に「うんうん、そうだ」と頷いた方も多かったのでは。どこかの首相の「産後3年間抱っこし放題」という発想とはちよつと違います。

すでに始まっている少子高齢・人口減少時代の中で、生産年齢人口比率の減少は避けられません。女性の労働参加は、労働力の確保、30歳代の男性の圧倒的な長時間労働への解決策として重要で、女性のためだけでなく、社会全体を良くするためのものです。



### 千葉市のイチオシ 保育待機児童対策

増え続ける待機児童が社会問題化していますが、新たに施設を増やしても、少子化により施設が余るのは確実。そこで、既存保育園の定員増や分園設置、幼稚園内へ認可保育所の整備、認可外保育施設を市でバックアップ、保育ママが三人一組で場所を借りてのグループ保育、などの対応で定員を増やしてきました。また、待機児童のいる家庭に一軒一軒電話で保育施設を紹介するなどし、待機児童が急激に減少しました。今後は量の拡大とともに、質の充実も求めています。

※待機児童とは  
子どもを預けて働きたい親が入所申請しているにも関わらず希望する保育所に入所できずにいる子ども

### ちよつとお願ひ! ファミリー・サポート

保育所・幼稚園・子どもルーム等への送迎やその後の預かり、また、保護者が急な用事や病気などで困っている時や、育児疲れのりフレッシュなど、そんな『ちよつとお願ひ』に答えてくれる方を紹介してくれるのがファミリーサポートセンターです。

あらかじめ預かってほしい人(依頼会員)と預かる事のできる人(提供会員)たちが顔合わせをしているので、お互いに安心して利用できるようです。基本的には預かる人の家で子どもを見ますが、慣れてきたら外へ連れ出したりと、臨機応変に出来ることも魅力。登録しておけば、いざというときに助けてもらえるという安心感もあるようです。事前に複数の方と顔合わせをするので、預けたい時に必ず誰か預かってくれる人が見つかるそうです。

### ファミリー利用者の声

私がファミリーサポートを知ったのは、次女が生まれた頃でした。子育て情報を集めている時に知りました。何かの時はお願ひしようと思つていましたが、登録もせずに過ごしていました。こういう仕組みがある、と知つていただけで安心だったのかもしれない。子どもたちが少し大きくなつてきた頃、研修を受け両方会員として登録しました。(研修を受けている間は子どもを託児していただけます。)

子どもが小さいとどうしても周囲にご迷惑を掛けがちだと思つていましたが、提供会員として活動している時は社会貢献ができる。実に魅力的な活動ではないでしょうか。

#### ※両方会員

(若葉区・S)

預かって欲しい子どもがいて、尚且他の子どもを預かることができ

### 市民が作った子どもの居場所

働く母親にとって、長期の休み中、子どもの過ごし方は気がかりなものです。

そこで夏休みの間の子ども居場所を自分たちで作ったグループがあります。稲毛区の小中台地域福祉交流館の一室を借りてワラビーが運営している「ランチルーム」です。

子どもルームの対象とならない小学校高学年生を中心に、ボランティアの見守りのもと、9時半から10時半までは勉強時間。その後12時から昼食をはさんで1時半まで、遊んだりおしゃべりをして過ごします。隣の公園へ遊びに行く子どももいます。

事務局の渡辺さんは「広報は特にしていない。顔の見える関係同士でやっている。市にやってもらうというのではなく、どうすれば子どもが安全に楽しく過ごせるのか、親たち皆で子どもたちの過ごし方を気にしていこうという事を大切にしている」と話されました。



「ランチルーム」で遊ぶ子どもたち

ただ、自分の仕事を持ちながら「ランチルーム」を運営するのは大きな負担です。今後このような取り組みが他地域にも広がり、継続していくためにも、事務局機能を委託できないか検討中だそうです。



子育て支援と一口に言っても、市ができること、私たち市民ができることがあります。

働き方も多様化している今、市に頼って制度ができるのを待つのではなく、地域の子育ては地域で行おうというグループがたくさん立ち上がり、それらを市が積極的にバックアップしていけば、子育て環境は飛躍的に良くなると感じました。市と市民がうまく連携してプレイパークや児童館のような施設が身近な場所にできるといいと思います。

(次号は介護編)